

きもちは、 言葉を さがしている



第 32 話

水野 スウ

大胆な平和

A Bold Peace——そのまま訳すと、大胆な平和、勇気ある平和。この言葉は、アメリカでつくられたドキュメンタリー映画の原題で、日本語のタイトルは「コスタリカの奇跡」。それに「積極的平和国家のつくり方」という副題がついています。

友人がひらいているフェアトレードショップでこの映画を上映すると聞いて、2002年に見た「軍隊を捨てた国」という名前の映画のことを思い出しました。そこで描かれていたのも、確かコスタリカだったな、と。

中米のニカラグアとパナマにはさまれた小さな国、コスタリカ。自然の生態系がとても豊かで、エコツーリズムの先進国として知られるこの国には、軍隊がありません。

美しい自然と一緒に暮らしながら、子どもの権利はなあに？と聞かれて即、「遊ぶこと、愛され

ること！」と答える子どもたちがとてもまぶしい。まるで夢物語のように美しい国。

でも、軍隊を持たない、というならばもしも敵が攻めてきたらどうするんだろう。人びとは不安じゃないのかな。まわりの国も平和だから戦争なんかにならないのかな。今回、「A Bold Peace」を見て、あの時感じた素朴な疑問に16年越しで一つの答えをもらったような気がしました。

軍隊を捨てた国

1949年につくられたコスタリカ憲法は、その12条で「常備軍の廃止」を謳っています。必要な時には軍隊を持つこともできるけど、いつも、じゃない。軍にかわる仕事は警察がにないます。そうやって今日まで70年間、コスタリカという国は軍隊を持たずにやってきました。

軍隊をなくしたおかげで、コスタリカではその分のお金を人びとの暮らしのために、教育や医療

や福祉、そして生物多様性世界一といわれる自然環境を守ることに、まわすことができるようになりました。当たり前なことだけど、国のお財布は一つですもんね。

2002年の映画の中では、小中学校まで学費が無料と描かれていたけれど、今回の映画で、今は大学まで無料が実現していると知りました。国民皆保険制度もあります。お金持ちは高い保険料を、そうでない人は安い保険料を払います。医療費は無料です。

この映画の中で、乳母車に子どもを乗せたお母さんが言っていました。「母親としてありがたいのはこの国の子どもたちが戦争しなくていいこと。軍隊にはいらなくていいことよ」。首都にある国連平和大学内の碑文には、「コスタリカ人の母は幸福にも子の誕生から兵士の道なしを知る」と刻まれています。

この大胆な平和は、いつ、誰が、どうやってはじめたのだろう。世界中の人がガンジーの名前を知っているのと同じように、コスタリカでは誰もがホセ・フィゲレス・フェレルの名前を知っています。

国民から親しみをこめてドン・ペペと愛称でよばれている、フィゲレス。彼は1948年、国内の混乱に黙っていられず、武装蜂起して時の政府と闘いました。革命に勝利したフィゲレスはその年の12月の式典で、国軍の要塞の壁に勢いよくハンマーを振り下ろし、「この要塞の鍵を学校に手渡し、今日からここは文化の中心だ」と演説して軍隊を解散させ、その翌年、常備軍を放棄する憲法を制定したのです。

一年あまり政権を率いたフィゲレスは、その短い期間に強い信念でもって、前の政権がまだ道半ばだった社会保障をさらに充実させていきました。銀行や電力を国有化して使いやすいものにし、そして平和を保つためには民主的な選挙のおこなわれることが何より大事、と選挙最高裁判所も設けました。

晩年になってからのインタビューで、彼はこう答えています。「軍隊は過去のもの。戦争は正常な状態ではありません。人にとっても、地球にとっても。戦争は病気で、平和が普通なのです」

非武装だからできること

コスタリカが軍隊を廃止できたのは、まわりが平和な国ばかりだから？ いえいえ、コスタリカのある中米って実は世界でも指折りの危険な地域の一つで、コスタリカのまわりには独裁政権や内戦状態の国が多数あります。

コスタリカに対してアメリカはこれまで何度も、自分たちのいいなりになる政権をつくろうと圧力をかけたり、武器を買わせようとしたり、米軍基地をつくらせようとしてきました。

東西冷戦の真っ只中には、レーガン政権から、コスタリカも戦争に参加するよう迫られます。隣国のニカラグアでアメリカ寄りの独裁政権が革命勢力によって倒されたことで、その勢力がもっと力をつけて共産主義が中米の国々にひろがってしまうのではないか、そのことをアメリカはものすごく怖れたのです。

革命勢力を攻撃しやすいよう、コスタリカに米軍基地をつくれ、と圧力をかけるレーガン。1983年、時のモンヘ大統領は、どちらの側につくということではなく、中立の立場で紛争解決に尽力するという態度で、ヨーロッパ各国の首脳を訪ね、コスタリカを支援してください、と訴えて回りました。そして帰国後、正式なコスタリカの永世中立を宣言し、カトリック教会と世界各国がこの宣言を歓迎しました。

親米と反米にわかれて争いが続く状況の中、アメリカとほどよい距離を保ちながらも、まるごといいなりにはならない姿勢を貫けたのは、コスタリカが非武装であることを強みにして信頼してもらい、世界を味方につけることに成功したからなのでした。

平和の輸出

モンヘ大統領が退陣した後、ニカラグアでは内戦が激化。1986年の大統領選で再びコスタリカは、非武装を貫くかどうかの選択を迫られます。アメリカが「このまま中立を続けると資金援助を打ち切るぞ」と圧力をかける中、アメリカ寄りの候補と、軍事路線に真っ向から反対するアリアス候補が争いました。その結果、コスタリカの人々は「援助を失おうとも未来を見据えよう、この道が国益だ」と訴えるアリアスを大統領に選んだのです。

アリアスは、先のモンヘ大統領がしたように、ローマ法王からイギリスのサッチャー首相まで、ヨーロッパの国々のほぼ全首脳を訪ねて歩き、中米和平計画を支援してもらった約束を取り付けました。それだけでも、世界にとって予想外な出来事でしたが、驚くのはこれだけではありません。アリアスは、ニカラグア、グアテマラ、エルサルバドル、ホンジュラスの大統領たちをホテルの一室に集めてとことん話し合い、ついに和平の合意に至らせたのです。

自国だけでなくまわりの国へも平和の文化を輸出したアリアス大統領は、この功績でノーベル平和賞を受賞します。受賞したのはアリアスでしたが、紛争国に囲まれる中、非武装を主張した彼を大統領に選んだのはコスタリカの人々です。その時の彼のスピーチにこんな言葉がありました。「平和とは終わることのない過程であり、生き方であり、紛争を解決する一つの方法だ、その努力に終わりはない」と。

大統領を訴えた大学生

「少なくとも私にとって国の安全保障は、まったく複雑ではありません」映画の中に登場する、憲法弁護士のサモラさん、彼の言葉は実に明快で合理的です。

「アメリカが攻め入ってきたとする。アメリカ

を阻止できますか？ 相手のロケット一基が、我々の年間警備予算を超えるんですよ、それでも自衛軍を持ちます？ ちっとも自衛できないのには？

単純に無意味なんですよ、It doesn't make sense!」

「正義は武器より強いと信じます。そして法的手段は武器よりも強いのです。国際法を信じることは、他国の敬意を信じることです」

小さな国が軍隊を持ったとしても大国には太刀打ちできない。だからフィゲレスは軍を撤廃した。軍事費は無駄だから、教育や医療にまわそう、発展の機会をつくろう、と言った。その結果、国が安定して、教育水準が上がり、民主主義が根づいた。若いサモラ弁護士が目ぢからこめてインタビューに応える表情は確信に満ちていました。

実はこのサモラさん、ロースクールの学生時代、時の大統領を憲法違反で訴えたというのですから、びっくりです。

2003年、アメリカのブッシュ政権はイラクへの攻撃をはじめました。他の国々も参戦するよう働きかけるアメリカ。あの時、日本の小泉首相（当時）はすぐにイラク戦争への支持を表明しました。そして、わざわざ新しい法律を作り（イラク特別措置法）、「非戦闘地域」にかぎるとして自衛隊が派遣されたことを、今もはっきりと覚えています（15年後の今年、イラクでの自衛隊の活動記録の日報が公開されて、派遣先はかならずしも非戦闘地域とはいえなかったことが明らかになりました）。

当時のコスタリカ大統領もその時、アメリカとともに戦う有志連合への参加を決めました。すると、中立国のコスタリカがイラク攻撃に賛同したことに、国民の99%が反対。法学部の学生として自分も何かすべきだ、と考えたサモラさんはたった一人で大統領を訴える訴状を書き、裁判所に提出したのです。結果は、サモラさんの勝訴。最高裁は、イラクへの侵略支援がコスタリカ憲法と平和的伝統に反するとの判決を下し、国は有志連合からの離脱を命じられました。

教育と子ども選挙

一学生であったサモラさんが、時の大統領を憲法違反で訴えることができたのは、もちろん彼の人間性もあるでしょう。でも私には、それだけでなく、この国の教育の目指すものがそこに反映されているように感じました。

軍事予算をゼロにすることで国家予算の3割を教育にあてることができたコスタリカ。その芯となっているのが「平和教育」です。

日本で「平和教育」というと戦争の悲惨や広島、長崎を学ぶことをイメージしがちだけど、コスタリカのそれは、もっともっと幅広い。自分たちの権利や責任、民主主義、自然と共に生きること、自分を表現すること、そして何より、自分の存在が大切だと思うきもち。相手も同じように大切と認めるきもち。この国の子どもたちはごくごく小さい頃から、学校でも家庭でも、それを学びます。

「軍隊を捨てた国」の映画の中で印象的だったシーン、子どもの権利はなあに？と聞かれて即、「遊ぶこと、愛されること！」と答える子どもたちの姿も、実は授業での一コマなのでした。

自分たちのいのちを生かしてくれている、豊かなコスタリカの自然環境を基本の教材にしながら、想像力をひろげて、平和を、幅広くとらえること。同時にもっと小さな単位、個々の家庭の中で、生活の中で、どれだけ互いを尊重しあって民主主義を実践できるか、ということを考えさせられました。

この国では、小さい頃から自分の意見を持つことがとても大切にされています。それが、民主主義の根幹だからです。選挙最高裁判所は、子どもや若者たちに、有権者になる前から練習の機会を積極的につくっています。

4年に一度の、大統領と国会議員を選ぶ選挙は、国をあげての楽しいお祭りのよう。親と一緒に投票所にやってきた子どもたちは、親とは別の部屋で、本物の候補者に投票する模擬選挙をします。

9歳も7歳も4歳の子どもも！ 家族や友達と投票先が違うのも、この国では当たり前のこと。子ども選挙ともよばれるこの模擬投票の結果は、大人たちの本当の選挙にも大きな影響を与えるそうです。小・中学生の中には、ボランティアとして投票所内の案内役をする子たちもいます。

幼い頃から何度も、選挙に参加することや民主主義のウォーミングアップをして大人になるからなのでしょう、コスタリカの投票率は毎回ほぼ8割をくだりません。ある若者は、18歳になったので選挙権を得る登録ができて、これでやっと本物の投票ができる、とうれしそうに話していました。

コスタリカの今とこれから

もちろん、現在のコスタリカに何の問題もないわけではありません。フィゲレスの時代には、富がきちんと分配されたことで、ラテンアメリカでもっとも中産階級の多い国となったけれど、グローバル化の影響で、近年は富める人とそうでない人の格差がすさまじいといえます。大資本のスーパーや多国籍企業の経営するホテルが次々に建って、限られた一部の人に富が集中し、彼らが政治を仕切ろうとします。そんな政治に不満を持つ人も多し、麻薬問題もいっそう深刻です。ラテンアメリカには麻薬の生産地が多い上に、何とんでもアメリカは世界最大の麻薬市場。コスタリカには麻薬とともにミサイルの弾頭まで密輸入されたりするそうです。

映画のラストは、2014年に行われた大統領選挙で、市民派のソリス候補が当選する場面で締めくくられています。新自由主義経済による格差をなくすこと、人々の間に薄らいできた環境保護意識にもっと力を注ぐこと、政治の腐敗を正すこと、性的マイノリティーの人たちの権利向上を政策にかかげたソリス。無名同然で、数ヶ月前まではほんの数パーセントの支持率しかなかった彼を、市

民たちがどんどん後押しし、フィゲレスの息子の支持も得た結果でした。

そして2018年の今年、連続しての大統領再選が許されないコスタリカで、次の大統領を決める選挙がありました。決選投票を経て、ソリスと同じ党の候補が当選。この選挙では、同性婚を認めるかどうかが大きな争点の一つでした。大統領に選ばれた彼は同性婚を認めることに寛容なのに対し、相手は伝統的な家族のかたちを重んじる、同性婚には反対の候補者だったそうです。

弱いことが強いこと

過去幾たびも大国から揺さぶられてきたコスタリカ。そのつど、外交努力を惜まず、世界との対話を重ね、国際法に訴え、交渉しつづけてきたコスタリカ。

「軍を持たないことで、弱くではなく、強くなったのです」「若い人々に、諦めないことの大切さを教えるのです」ブッシュ政権時の、アリアス大統領のこの言葉は、シンプルだけでもとっても深い。

コスタリカは現在、いくつもの国際条約に加盟しています。生物兵器禁止条約、ウラン兵器の禁止、独裁政権や軍事国家に武器販売の禁止を目指す武器貿易条約、対人地雷禁止条約、クラスター弾に関する条約、地球温暖化に関する京都議定書、女子に対するあらゆる差別撤廃に関する条約、子どもの権利に関する条約、この他にももっと。

2017年7月、核兵器禁止条約に122の国々が署名して、国連ではじめて採択されました。条約の賛同を求めて各国政府に働きかけた国際的NGO、核兵器廃絶国際キャンペーンICANが、この年のノーベル平和賞を受賞したのはまだ記憶に新しいでしょう。日本人ヒバクシャたちが長年、核兵器の非人道性を世界に訴え続けてきた努力の証しでもあります。

実はこの条約の原案ともいえる文書を20年も前に国連に提出し、その後も他の国々に呼びかけ

続けた国は、ほかならぬコスタリカだったのです。条約交渉会議の議長を勤めたのも、コスタリカ大使でした。

アメリカなど核を持つ大国と、そのアメリカの核の傘の下にいる日本はこの条約には署名せず、国連での会議にも欠席。この時、日本の委員の座る席には折り鶴が一羽置かれていました。それは、日本のあなたにここにいてほしい、というメッセージだったでしょうか。

軍を持たないことが強いこと。敵のいないことが強いこと。それを長年、体現してきたことで、コスタリカの人たちの中に、紛争があれば武力に頼らず、万策を尽くしてとことん話しあい続ける、平和は自分たちの文化なのだという精神が、おそらく何層にも積み重ねられ、育まれてきたのでしょう。

コスタリカはあたらしい安全保障の選択肢を示してくれています。でもそれに完成形などありません。国民一人ひとりに、この社会を支えているという自覚があり、議員まかせじゃない民主主義を、ふだんの努力で実践してきたからこそ、それを次の世代にも伝えようとしてきたからこそ、持続可能な今のコスタリカがあるのだと思います。

私の背骨

「コスタリカの奇跡」の映画をつくったのは、エディさん、ドレリングさんという二人のアメリカの社会学者さんです。東京の上映会では、来日された監督たちお二人のお話を聞くことができました。

彼らはアメリカの人たちに、コスタリカの人たちの生き方や価値観を通して、軍事主義とは別の方法があることを知ってほしくて、この映画をつくったそうです。

エディ監督は言います。「コスタリカのケースはほとんど知られていないストーリーですが、私たちに新しい国家安全保障のモデルを見せてくれ

ています。コスタリカは外交を中心に他国との信頼関係を築くことで、軍に頼ることなく国家の安全を保障することに成功しました。」

「安全保障」って、なんだか難しい言葉に聞こえるけれど、英語では"security"。コスタリカは他の国に信頼されるような国をつくること、攻撃したら世界が黙っていないと思われるような国をつくることで、自分たちの国を守ってきた、ということなのですね。

「アメリカでの上映会では、涙を浮かべてお礼を言ってくれる人、関心を持ってくれる人もいました。だけど、残念なことに、そういう人たちですら、ほとんどが最終的には『コスタリカから学べることは何もない』という感想で終わってしまいます」。

え！ この映画を見て学ぶことは山ほどある、と感じていた私とは、まるで真逆の感想です。

「アメリカ人はずっと長い間、自分たちは常に敵に狙われている、という被害妄想を植えつけられてしまっているのです、軍隊に頼らない国づくりというものが、自分の想像をはるかに超えすぎてしまって、もっと知ろう、というきもちになる前に、そんなの無理に決まっている、と思考がシャットダウンしてしまうのです。軍を持つべきか持たないべきか、議論する余裕すらありません」

自分の国が他国からの脅威にさらされているという恐怖を煽られ、国家予算の約半分が軍事費につきこまれているアメリカでは、平和が、時には戦争と同義語です。正義＝戦争、だったりもするのです。平和のために戦争する、とアメリカのリーダーたちはこれまで何度も言ってきました。2001年の9.11のテロのあと、たった数日でアメリカ中が愛国心で団結し、平和のための“正義”の戦争へと一気になだれこんでいった、あの時に感じた恐怖を私はまだ忘れていません。

ドレリング監督は言います。「アメリカはいつでも戦争ができるんだぞ、という心理になっている。これって、人間にとって決して健康なことで

はありません」

憲法で、自分の身を守るために銃を持つことが認められているアメリカと、武器を持たないと決めた憲法を持つ日本。出発点からして大きく違っているのです。

何としても戦争はいやです、と私が言い切れるのは、実は1947年にできた憲法第9条があることによって培われてきた、戦争をしないことが当たり前前の国で生まれ育った私の、メンタリティーの背骨ではなかったのだろうか。軍隊持つべきか持たざるべきか、そういう議論の余地がまだ、かろうじて残っている国に、私たちは生きているのです。

これほどたくさんの人が集まってくれた上映会は初めてだ、と驚くエディ監督。「今回日本の皆さんがコスタリカにこんなにも興味を持ってくれることが心強い。それはきっと、平和憲法を持っているという共通点からでしょう。」

日本のArticle 9はコスタリカの憲法よりずっと有名で、世界中に知られていて尊敬されているのですよ。どうかその平和をこれからも守ってほしい」

積極的平和、って

平和＝戦争、とはならないはずの日本だけれど、安倍政権は2015年の安保法制のことを「“平和安全”保障関連法」と名付けたので、ほおっておくと日本もそちらの方向に近づいてしまうかもしれません。

安倍さんは、安保法制をつくることを「積極的平和主義」だと言いました。英語にすると“proactive contribution to peace”。プロアクティブとは、戦略用語で、先制攻撃、という意味だそうです。先制攻撃的な平和貢献、つまり、戦争と一体になった平和。

あれ？ この映画の副題にも「積極的平和」って出てくるけど……？ 実は元々の「積極的平和」

という言葉の生みの親は、ノルウェーの平和学の父とよばれるヨハン・ガルトゥング博士。博士は、単に戦争がないだけの状態は消極的平和でしかなく、貧困や差別や格差、といった構造的な暴力のない状態を積極的平和“positive peace”、とよび、そのような社会こそめざすべきだと提唱しています。

安倍さんの「積極的平和主義」は、ガルトゥング博士の「積極的平和」と響きは似ているけど、意味がまったく正反対。誰かと平和について語りあう時、あなたのイメージする平和はどういう平和なの？と確認しあうことがとても大事、と私が思う所以です。

ドレリング監督は言います。

「国と国とが協力しあって積極的平和をつくっていくために何より欠かせないのは、それぞれの国の市民が、自分たちの国のリーダーに、暴力を使わないで世界の問題や紛争を解決していくことにもっと貢献して、と強く訴えかけることです」

「私たちに本当に必要なのは、お互いが安全に平和に暮らせること、その暮らしを分かち合えること、清潔な環境、安全で美味しい食事、そして、仲間たちと分かち合える時間。それこそが私たちに必要なものなのだ、という信念を持って生きていく。まさにコスタリカの人、そのようによりシンプルで人間らしい生き方を実現しているのだと思います。

人間としての本質的な兄弟姉妹と呼び合えるような関係、そうやってお互い助け合えるような社会を国際的に広めていくには、私たちは人として国民として、どう世界に平和を訴えかけていくべきなのか、そしてどうすれば私たちの未来の子どもがちゃんと平和を持てるのか、そういう質問を投げかけていきたいと思います」

思えばいいだけ

上映会では、コスタリカ研究家の足立力也さん

のお話もありました。『丸腰国家』という本の著者でもある彼のもとには、軍隊を持たないという、コスタリカの国の制度のことを知りたがるそうです。国の制度が違うから、そういうことができるのだろうか、と。

足立さんは、違いは制度じゃないんです、解釈が違う、人の考え方が違うんだよ、と言います。制度という意味では、日本の方がずっと厳格です。戦争をしない、武力を持たない、という日本の9条。文字通り読めば、日本は世界で一番の非武装国のはずです。それに比べて、コスタリカはゆるゆる。いつもは持たないけど、必要な時は軍隊を持ってもいい、と書いてあるのがコスタリカの12条。

だけど、大統領でも、警察のトップでも、法学者でも、そこらへんを歩いているおじちゃん、おばちゃんでも、非武装についてどう思うかをたずねると、コスタリカは軍隊を持たないし持ちやいけない、と答える。憲法では「持てる」と書いてあるものを、「持たない」と解釈している。その考え方の違いが、面白いところ。考えることなら、僕らがそう思えばいいだけじゃないですか、と足立さん。「思えばいいだけ」。この言葉に、はっとしました。

足立さんは最後に、フィゲレスのお連れ合いカレンさんから日本の皆さんに預かってきた、というメッセージを紹介してくれました。

「毎晩お布団に入ったら、ぜひ二つのことを言ってください。自分にとっていい人間はどんな人間？自分にとっていい社会はどんな社会？これだけをちょこっと考えてください。すべては自分の中から始まっていくっていうこと」これがコスタリカから伝わってきた、平和のメッセージです、と。

握手する12条

この章の最初にもどって、映画のタイトル「コスタリカの奇跡」と、その原題である「大胆な平和」という言葉についてもう一度考えてみたいと思います。

70年前にフィゲレスが打ち出した、軍隊を持たないという政策は確かに大胆な決断でした。その政策が70年間守られ続け、今もなおコスタリカが、軍隊を持たない国であるということ。これは奇跡でしょうか？

奇跡、という言葉は、ありえないことの代名詞のようにも聞こえるけれど、私は、コスタリカの平和を単純にその一言に閉じこめてしまいたくありません。大胆な決断であるコスタリカ憲法12条を、コスタリカの人々は教育でもって、強い精神でもって、ずっと支えてきたのです。それは、コスタリカの人々の70年にわたる普段の暮らしの中の、不断の努力。

はからずも、これは日本の憲法12条に書いてあること、「この憲法が国民に保障する自由や権利は、国民の不断の努力によってこれを保持しなければならない」ということの実践です。これってまるで、日本の12条と、遠く離れた中南米の国、コスタリカの12条とが、海を越えて握手しているみたいではありませんか？

私はふだんから「12条する」という言葉を意識して使っています。私たちの自由や権利は、他から奪われたりおかされたりしないもの。憲法にそう書いてあるからといって、憲法にまかせっきり、というわけには実はいかないんだ。力をもったものが、私たちの権利をないがしろにしようとする時、はっきり声に出して、それはおかしい！って意思表示しなきゃいけない。そういう努力を休まず続けることで、私たちの自由や権利は、やっとこ保たれる。不断の努力を、日々普段から。それが私にとっての「12条する」こと。

コスタリカの人たちこそ、軍隊を持たない国であるために、自分たちがどう考え、どう動くべきか、という12条を70年間もずっとし続け、今のコスタリカをつくってきた。「大胆な平和」という映画と出逢ったことで、そのことをしっかり気づかせてもらいました。

なのでこれからは、「12条する」という時、そ

こにコスタリカの人たちの強い意思——自分たちは武力に頼らない、この国の未来をひと任せにしない、この国のことは自分たちが選んで決める、という勇気も重ねて、この言葉の中に込めることにしよう、とひそかに思っている私です。

マシュー・エディ、マイケル・ドレリング「コスタリカの奇跡～積極的平和国家のつくり方」、2016年、アメリカ・コスタリカ

配給：ユナイテッドピープル（DVDも販売しています）<https://www.cinemo.info/movie>

『シネ・フロント399号（2017年10月）』。（「コスタリカの奇跡～積極的平和国家のつくり方」のシナリオが再録されています）

山本洋子「軍隊を捨てた国」2002年、日本

